

Let's Know Hiroshima Castle.

しろうや! 広島城



No.44

広島の名工

刀工 石橋正光

昨年度、広島城では幕末期から明治初頭にかけて活躍した刀工、石橋正光を紹介した企画展「安芸の刀工—正光」を開催しました（会期：平成26年12月13日～翌年2月1日）。今回の「しろうや！広島城」では、この展覧会を通じて得られた成果や話題をいくつかご紹介したいと思います。

芸州住出雲大掾正光

正光は、享和2年（1802）、刀工正長の四男として山県郡高野村（現同郡北広島町）に生まれました。兵七、弘之進とも称しました。3人の兄も刀工だったようですが、遺存する作品が少なく、詳しいことはよくわかっていません。技量的には、正光が最も秀でていたようで数多くの優品が残されています。

正光が誰に師事し、鍛冶修行したかなど、青年期の伝記は明らかになっていません。制作年のわかる作品で最も古いものは天保5年（1834）とされますが、文政12年（1829）には、出雲大掾という官位を名乗ることを許されており、30歳ごろにはそれなりの実績をあげていたものと思われます。天保8年（1837）には隣村移原（現北広島町）に移住、独立しました。

このころになると、正光の名声は藩府にも知られるようになったようで、藩主浅野家とのかかわりを示す資料がよく出てくるようになります。具体的には、浅野家への刀の献上の記事がしばしば見え、一方では袴の着用や他所行の際の帯刀などが許された記事が残っています。安政5年（1858）には



刀 銘 芸州住出雲大掾正光
慶応二年寅八月日 刃長 70.6cm 反り 1.4cm
堂々とした姿、見事に焼かれた刃、よく鍛えられた刀身、これぞ正光、という傑作の一振

本号で取り上げた刀は、3を除きいずれも個人蔵です。

扶持米取となり、藩の御用鍛冶となりました。

また、隣藩浜田藩からの注文も受けていました。おそらくは長州戦争が深く関係していると思われますが、元治元年(1864)10月、200振もの注文があったようです。息子の卯吉、弟子の宮太とともに調製にあたったそうですが、一年もたたず、翌年7月には納品したようです。さらにこの年、続いて100振の追加注文を受けています。もちろん、献上品のようなレベルの高い刀ではないでしょうが、この仕事ぶりには驚嘆させられます。

明治となり武士の時代が終わっても、正光は刀を打ち続けました。現在確認されている最後の刀は明治8年(1875)、75歳のときのものです。翌年いわゆる廃刀令が布告され、警官などを除き、原則帯刀が禁じられました。日本刀を巡る環境の激変を見届けつつ、その3年後の明治12年(1879)、正光は78歳の生涯を終えました。まさに作刀に捧げた人生であったといえるでしょう。

正光の刀

さて、正光の刀の特徴は、総じて真面目なものとされており、愛刀家の間では高い評価を得ています。全体的な印象は、幕末の激動の時代を反映してか、長尺で幅も広い迫力のあるものです。刃文は直刃(※1)のものが多く、地鉄はよく鍛えられて、詰んでいます(※2)。材料についても納得がいくものが手に入るまで作刀しなかったようです。茎に刻まれる几帳面かつ力強い銘と相まって、正光の刀を見ていると、厳しい職人氣質が伝わってくるようです。

- ※1 直線的な刃文のこと。波打っているようなものは乱れ刃と総称し、様々な種類があります。
- ※2 日本刀の材料の鉄は、何度も何度も折り返しながら叩かれ、無数の層を作りながら刀として仕上げられていきます。そのため、表面を研ぎあげると、木目のようなその痕跡が現れます。目の細かいものを「詰む」、はっきりと見えるようなものを「肌立つ」などと表現します。

慶応2年2月の2振

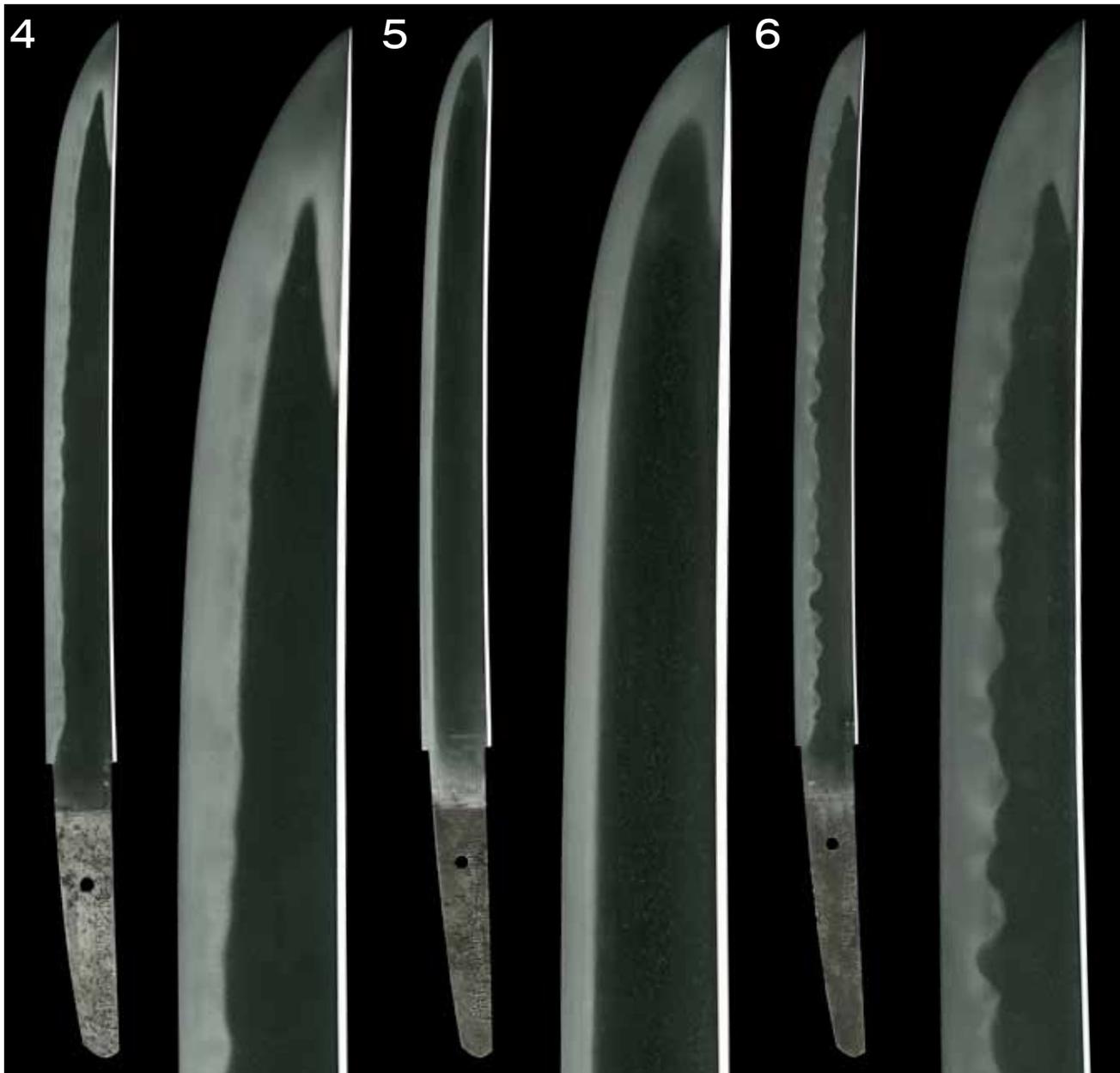
2と3はともに慶応2年(1866)2月の年紀を持つ刀(※3)です。長さはほぼ同じ、3に樋(※4)があり、わずかに細身であるほかは、外形(姿)も刃文もよく似ています。違いは、銘がそれぞれ「以地産鋼鉄冶之鍛之」、ちざんこうつをもつてこれをやしこれをきたう「以石州邑知鋼鉄冶之鍛之」となっており、せきしゅうおおちこうつをもつてこれをやしこれをきたう材料として地元産の鉄を使ったか、現在の島根県のものを使ったかということにあります。中国山地は古くからたたら製鉄が盛んにおこなわれていたことはよく知られていることですが、一般に、広島側の砂鉄は刀剣には向かないとされています。それでもあえてチャレンジし、島根側との比較を試みたのでしょうか。こういった内容の銘を刻むこと自体大変珍しく、その意味でも貴重な作品です。ちなみに私には見た目の違いはほとんどわかりませんでした(むしろそれだけ正光の技量が優れていたことの証明なのかもしれません)。

ところでこの2振、同じ時期に作られたものながら、現代への伝来は全く違います。2は個人の方が大切に伝えられてきたものですが、3は赤羽刀と



いって、敗戦時、連合国軍によって接収された刀剣で、廃棄処分を免れ、長らく東京で保管されていたものです。平成11年(1999)、国から当館に譲渡されました。いつ、どんな経緯で離れ離れになったのかはわかりませんが、本企画展で再会を果たせたことに感慨を覚えます。

- ※3 ふつう刀の茎には、腰に差したとき外側になる面に作者名、内側に制作年が刻みこまれています。
- ※4 刀身に彫られた溝のこと。強度を落とすことなく重量を減らすことができるとされます。もちろんデザイン的な意味もあったでしょう。



元治2年2月の3振

4～6はどれも元治2年(1865)2月の年紀がある短刀・脇差です。意識したわけではないのですが、同時期に作られたものがたまたま3振揃いました。比較してみると、若干の長さの差(それぞれ28.9、30.2、33.3cm)はありますが、鑄しのぎを持たない平造ひらづくりという造り込みで、姿はほぼ同じです。「芸州住出雲大掾正光」の銘もコピーのように共通

しています。大きな違いは刃文にあります。5が直刃であるのに対し、4・6は乱れ刃きつどきです。鋒部分の刃文(帽子といいます)の棟側への折り返し(返りといいます)は、5がすっきりとカーブを描くのに対し、4・6はゆるやかに波打ちながら鋭角に返ります。また、4のほうがかかなり長く続いています(返り深い、と表現します)。正光の探究心の現れでしょうか。

ところで、この元治2年2月という時期ですが、先に触れた浜田藩からの大量発注の時期と重なります。それだけでおそらく目が回るほど忙しかった

と思うのですが、このような優品を残すなんて超人的とさえ思えます。

(大室謙二)



正光屋敷跡

正光屋敷跡は、旧移原村のほぼ中央、小高い丘の裾にあります。正面入口付近の石垣（左画面）は、城郭や寺院などに見まごうほど重厚なものです。鍛冶場を想像させる直接的な遺構はよく確認できませんが、鍛冶に欠かせない水をひく水路が今も残っています。昭和43年(1968)、正光を慕う有志らにより、「芸州石橋出雲大掾正光鍛刀之宅跡」と刻む顕彰碑が建立されました（右上画面）。またこの地は、いわゆる一本桜の名所のひとつとして知られ、石碑脇のエドヒガンの古木（左上画面中央右寄り）は、例年4月中旬から下旬にかけて多くの人の目を楽しませています。

しろや
!
広島城

編集・発行

公益財団法人広島市文化財団
広島城

〒730-0011
広島市中区基町21-1
電話：082-221-7512
FAX：082-221-7519

平成27年6月10日発行

広島城利用案内

開館時間：9：00～18：00

(12～2月は9：00～17：00)

入館の受付は閉館の30分前まで

観覧料：大人370円(280円)

高校生相当・シニア〔65歳以上〕180円(100円)

()内は30名以上の団体料金

休館日：12月29日～31日(臨時休館あり)

ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>



「しろや! 広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページからダウンロードできます